

【シントリが鵜飼の鵜になるまで】

長良川で漁をするすべての鵜は、かつては野鳥であった。春や秋には、新鳥（シントリ）が茨城県で捕獲され、岐阜に向けて出荷される。通常、長良川の鵜匠は毎年少なくとも1羽の新しい鵜を注文するが、多いときでは一度に4羽の鵜を注文する。新鳥は、それぞれに仲間の鳥ができるよう、通常は二羽一組で注文される。このように手配することで、新鳥が鵜の社会階層に十分に馴染むまでに、他の鳥から孤立したり、いじめられたりするのを防ぐ。

鵜を捕獲する罌師は、完全に成熟する前のおよそ2歳の鳥を捕まえる。新たに捕獲された鵜は、編んだ特殊な籠に入れられ、上のくちばしの周りに木のブロック（ハシガケ）を結ばれた状態で鵜匠の家に届けられる。ハシガケの長さはおよそ5センチで、鳥の上のくちばしの曲がった先端に合う小さな穴が開いている。ハシガケを付けられた鳥は、口を開くことはできるが、くちばしで切りついたり、つついたりすることはできない。到着した日、新しい鵜はまず初めに獣医による詳細な健康診断を受ける。その後、鵜のくちばしの内側の縁にやすりがかけられる。これにより、上下のくちばしの間に空間を作り、噛みつきによって生じ得る損害を最小限に抑える。鵜匠はまた、鵜の片側の翼の風切羽を5～6本切り取る。こうすると、鵜はバランスを保つことが難しく、遠くに飛べなくなる。くちばしと風切羽はどちらも数か月以内に再び成長するが、その頃には、新しい鵜は、新たな環境にも慣れてきている。

新鳥は最初の2～3か月の間、メインの群れとは分けて飼育される。鵜匠は新鳥と親密な関係を築くため、これらの鳥を頻繁に扱う。また、新鳥を川に連れて行き、短く泳がせることで新しい仕事を経験させる。鵜匠が新鳥の性格を把握し、新鳥が十分に適応したと自信を持てた段階で、その鳥をメインの群れに紹介する。

鵜の上下関係は、年齢や性別ではなく、身体的な強さや性格により決定される。最も強い鳥は小屋（鳥屋）の中が一番良い場所を主張し、その場所を他の鳥から守るようになる。鵜は生来どう猛な気質を持っているので、争いを野放しにしておけば、お互いをひどく傷つける場合もある。鵜匠が上手いタイミングで新鳥を紹介すると、年長の鳥は新しい仲間に対し、優位な序列が得られるまで自らの権利を主張する。

新しい鵜は頻繁に川に連れて行かれ、つなぎ縄（手縄）が付けられた状態で、水に飛び込んだり泳いだりすることを学ぶ。初めて縄に繋がった時は、後ろにひっくり返ったり、縄が絡んだりすることが多い。手縄を繋いで泳ぐことを学んだ後も、漁をする鳥として成功するには、かなりの練習を要する。鵜匠が初めて新鳥を漁に連れて行ったとき、ほとんどの鳥は、水に潜ることもしない。最終的には、新鳥は潜ったり鮎を追いかけたりするにあたり、他の鵜を手本として真似し始める。しかし、特に優れた鳥でなければ、1年目には、魚を捕ることはできないであろう。ほとんどの鵜は、2年目に技能を習得し始め、3年目までに一人前になると考えられている。